

## 隋唐時代の鏡文化（1）

——銘文鏡の特徴とその盛衰をめぐって——

黄 名 時

### 1. はじめに

中国ではおよそ4000年前の齐家文化期に青銅鏡が現れ、それは最後の王朝・清朝まで伝統的に継続して製作されてきた。鏡の背に各種の図像が考案されたが、およそ2000年前の漢代から図文だけに飽き足らず、本格的に文字の意匠を凝らすようになる。銘文は少ないもので数文字、多いものでは数十文字に及ぶ。ここにおいて銘文鏡を製作する伝統が形成されることとなる。

鏡の銘文には、高位高禄・子孫繁栄・不老長寿などの願望を記したものがもっとも多く、例えば、「高官厚禄」、「富貴榮華」、「延年益寿」、「多子多福」、「長樂未央」、「延年益寿去憂事、長樂万事宜酒食」などの銘がみられる。また「長相思、母相忘」「長母相忘、幸母相忘」「与天無極、与地相長」「君有行、妾有憂、行有日、返母期、願君強飯多勉之、仰天太息長相思」など、男女間・夫婦間の相思相愛の情を伝える辞句も少なくない。とりわけ相思の情を表現した銘文鏡の占める割合は特に多いといえよう。ほかにも邪気を追い払い、福を招来する吉祥句を入れた銘文がある。さらに鏡の製作者・鑄造所・製作年代・品質宣伝文句を刻した銘文もあるが、これは鏡のブランドを強調した諷文句であり、商品のコマーシャルであると考えられる。

鏡の図文や銘文は、時に対外交渉の中で、また時に国内事情の変化の中で異なる様相を展開してきた。憧れの生活への思いや相思相愛の情を詠うなど、鏡の銘文には人々の生活実態が表れており、ここには古代人の人生観や社会観・世界観が反映されているといえよう。鏡に鑄出された銘文を見ることによって各時代の中国文化の消長の一斑を窺うことができる。小稿では、300年に亘った隋・唐王朝の社会背景のなかで展開し変遷してきた銘文鏡に焦点をあて、各時期の銘文作りの特徴をみていく。併せて銘文鏡の製作の伝統が一時期廃れた要因およびその背景にも触れたい。これによって隋唐鏡鑑史の中の各時期の鏡の特質を明らかにしていきたい。

### 2. 中国の銘文鏡の形成—漢鏡の銘文の展開

中国最古の詩集『詩経』の詩歌においては一句四言が基本であった。「桃之夭夭 灼灼其華 之子于歸 宜其室家」の如く、各句四音節の句調が北方の『詩経』の基本的リズムとなっている。一方、南方楚の民謡を源とする『楚辞』には三言の奇数音節のリズムがあり、六言（三言＋三言）が基本的句調である。

中国で最初に銘文を鑄出した鏡が登場したのは戦国時代の末期であった。ここにおいて鏡背の

装飾の一部として図像の間に文字を刻む風習がスタートする。つづいて漢代に入ってから、鈕座を囲んだ方格銘帯が現れる。漢鏡の銘文では『詩経』『楚辞』の歌謡のリズムを継承した四言句、三言句が採用され、さらには四言+三言の詩型も用いられた。『楚辞』の気風に近い、句末に「兮」の文字を入れた鏡もみられる。銘文が4文字もしくは3文字からなる例として、「見日之光，天下大明」「日有熹，宜酒食，長貴富，樂母事」などがある。また「大樂貴富，得所好，千秋萬歲，宜酒食」などの銘文をもつ鏡があり、これは4文字と3文字が組み合わせられた長短句である。

前漢中期の武帝時代の頃になると銘文をもつ鏡が増加し、これ以降、本格的に鏡に銘文を施すことが一つの特徴となる。この時期に長文の銘文や銘帯を主文様とする鏡が登場し、銘文が周りの図文に取って代わるほどの勢いとなる。銘文そのものを鏡名とする一群の銘帯鏡の出現である。韻文の吉祥句を用いた主な銘帯鏡の銘文には上述の「見日之光，天下大明」（日光鏡）や「内清質以昭明，光輝象夫日月」（昭明鏡）があり、鏡が陰気を遠ざけ邪気を鎮める、と謳う内容である。この種の鏡の特徴は、銘文の書体が楔形や小篆体で、略字・異体字を用いるとともに字句を省略する点である。前漢末に出現した「方格規矩四神鏡」には銘帯があり、銘文には多くの種類があるが、一例として七言句で「尚方作竟眞大好，上有仙人不知老，渴飲玉泉飢食棗，浮遊天下敖四海，寿如金石為国保」と謳う。後漢中期以降には紀年銘鏡も出現し、工匠の姓氏を記した銘文、および鏡を宣伝する銘辞が盛行した。後漢時代にも、上述の七言句などを用いた種々の銘文鏡があるほか、世俗的な願望の四言句である「長宜子孫」「君宜高官」「位至三公」等の銘が流行した。高位高官・子孫繁栄・不老不死を祈るこれらの吉祥句は、この時期の現世的希求と神仙思想の流行を物語る。画像鏡にも銘帯をもつものがあり、「尚方作竟眞大巧」「尚方作竟四夷服」などの銘文を入れることが多く、他に「東王公，西王母」などの神仙名を刻んだものもある。神獸鏡は紀年銘鏡が多く、「建安」紀年鏡が著名である。主に「吾作明竟」の銘であり、外区に銘帯をもつものもある。後漢の種々の神獸鏡に見られるように、鏡に銘文を鑄出す風習が継承されていく。透光現象を伴うとも言われる「三角縁神獸鏡」は三国魏の特鑄品であるとの説もあるが、銘帯がめぐり、銘文に景初三年（239）や正始元年（240）の魏の年号を入れた鏡があるため、特に注目を集めている。三国時代の銘文鏡には、長短不揃いの銘文が少なくない。

### 3. 隋唐時代の鏡の様式とその展開

つづく隋唐時代の銘文鏡について論述する前に、隋唐鏡の様式とその展開の概略を纏めておきたい。

隋～唐代に鑄造された鏡は、文様が多様で種類が多岐にわたり、独特の様式をもち、数多くの逸品がある。肉厚、白銅質で白銀色の鏡が多いが、黒褐色のものもある。発展段階はおよそ4期に分かれる。Ⅰ期は6世紀後半～7世紀後半、Ⅱ期は7世紀後半～8世紀初頭、Ⅲ期は8世紀初頭～8世紀後半、Ⅳ期は8世紀後半～10世紀初頭である。

Ⅰ期の隋鏡と唐初の鏡は魏晋以来の伝統的要素が色濃く残る。十二支唐草文鏡・四神鏡・団花鏡・方格四獸鏡などが盛行し、主文は異なるが構成や銘文などに定型化した共通性をもつ。やが

て走獸葡萄鏡が登場し、多くの変化が現れる。銘帯が基本的になくなり、内外両区に忍冬文・蔓草文・葡萄文が採用され、獸文も動的な表現へ変化した。

唐中期にあたるⅡ・Ⅲ期になると、鏡作は豪華絢爛の盛唐期の時代に入る。主要な産地は揚州で、鏡が特産品として宮廷へ献上されたことにより多彩で洗練されたものに発展し、独特の装飾美が形成されて広く流行した。Ⅱ期の高宗・則天武后時代は、瑞獸を主文とする海獸葡萄鏡が流行し、続く俊猷双鸞鏡では鳳凰と瑞獸とが対等の位置を占め、文様が瑞獸から花鳥へと変化する過渡期の形態を呈する。瑞獸は次第に副次的地位に置かれ、替わって飛禽と花枝を主文とする雀繞花枝鏡が現れる。鏡形も円形・方形の伝統を破り、八稜鏡・八花鏡などの花式鏡が出現した。Ⅲ期は玄宗の開元・天宝年間（713-756）前後に相当し、製作と献上の最盛期にあたる。内外区の束縛がなくなり、鏡背全面に写實的絵画的な表現が可能となった。稜形・花形の鏡が主流となる。主文は瑞獸から禽鳥へ、さらに瑞花・花枝の植物文様へと変化していく。その一方で神話伝説に由来する文様が大量に出現した。花鳥鏡・瑞花鏡・飛仙鏡・高士弹琴鏡・孔子榮啓期鏡・月兔鏡・馬毬鏡・狩獵鏡および雲龍鏡などがこの時期に盛行した。また、技法を凝らした金銀平脱鏡・螺鈿鏡・鍍金貼銀鏡などの宝飾背鏡も流行した。

唐晩期のⅣ期以降、鏡製作は急速に衰退し、技術・図文とも粗略・脆弱になる。銘帯をめぐる例が再び多くなり、鏡形は円形のほかに亞字形や方形が流行する。道教的な八卦文を置いた八卦鏡、仏教の卍形文様を配した卍字文鏡、単純な植物文様の花葉文鏡などが盛行した。唐代には多くの鏡が日本にも舶載され、正倉院には海獸葡萄鏡のほか、多彩な宝飾背の伝世鏡がある。

## 4. 隋唐鏡の時代区分と各時期の銘文

### 4-1. 隋唐鏡の時代区分と唐詩の時期区分

#### （1）唐詩の時期区分

唐代は漢詩文化が最も花開いた時代であり、首都の長安は数多くの詩人が集まる漢詩の都でもあった。杜甫の詩「飲中八仙歌」にも、「李白一斗詩百篇，長安市上酒家に眠る。」などと詠われる。

詩歌の黄金時代であった唐の詩史の時期区分は、隋唐鏡鑑史上の時代区分とやや異なるところがある。隋唐鏡の銘文には様々な詩句が刻まれており、銘文鏡と唐詩の盛行時期との対比の観点から、文学史上の唐詩の時期区分を明確にしておきたい。初唐・盛唐・中唐・晩唐の各時期の概要をここに略述する。

- I 期 初唐（618～712）：唐王朝が成立し発展した時期であり、王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王の四傑が代表的な詩人である。この100年の間に近体詩の形式がほぼ完備する。五言詩以外に、七言詩も作られるようになる。王勃は駢儷文の作家としても知られる。
- II 期 盛唐（713～765）：主に玄宗皇帝の在位期間であり、王維・孟浩然・王昌齡・李白・杜甫・岑參など優れた詩人が一斉に輩出した。唐王朝の最盛期であり、唐詩の最盛期でもあるが、最後に安史の乱が勃発し国運が衰え始める。

Ⅲ期 中唐(766~826):安史の乱が収まった後の比較的安定した時期であり、白居易・韓愈・柳宗元・韋応物・李賀などが代表的詩人である。

Ⅳ期 晩唐(827~906):唐王朝が衰亡していく時期であり、杜牧・李商隱・温庭筠などが活躍した。詩は世相を反映して世紀末的な退廃の色彩を帯びる。李商隱・温庭筠は駢儷文にも長けた詩人である。

唐詩の時期区分は上述の如くであるが、各時期によって詩風に著しい変遷がある。一般に初唐は「形式美」、盛唐は「雄健高雅」、中唐は「平淡」「險怪」、晩唐は「繊細優艶」を特徴とする。

#### (2) 隋唐鏡の時代区分

隋唐鏡の発展段階は文学における詩史の状況と異なり、「隋・唐初期」「唐中期」「唐晩期」の3段階に区分される。ただし、小稿では唐詩との対比の観点から、「隋唐鏡の様式とその展開」に述べた如く、隋・唐初期のあとの唐中期を「盛唐期」とし、さらにこれを盛唐前期・盛唐後期(Ⅱ期・Ⅲ期)に分け、つづく唐晩期と合わせて下記の如く4段階に区分する年代観を視野に入れる。

I 期 隋・唐初期(隋から唐高宗時代)6世紀後半~7世紀後半

Ⅱ期 盛唐前期(高宗・則天武后時代)7世紀後半~8世紀初頭

Ⅲ期 盛唐後期(玄宗から徳宗時代)8世紀初頭~8世紀後半

Ⅳ期 唐晩期(徳宗から晩唐・五代)8世紀後半~10世紀初頭

このように唐詩の時期区分では初唐の後半期にあたる高宗・則天武后の時代(7世紀後半~8世紀初頭)は、唐鏡の時代区分では盛唐前期にあたる。つづく玄宗~徳宗の時代(8世紀初頭~8世紀後半)が盛唐後期にあたり、この時代が唐鏡の最盛期であった。

#### 4-2. 隋唐鏡の各時期の銘文

隋唐鏡の時代区分の概要は上述の如くであるが、つづいて銘文鏡の銘文例を各時期にしたがって記す。

##### I 期 隋~唐初期

銘帯を配した鏡が流行した時期であり、主に「十二支鏡」「四神鏡」「団花鏡」「瑞獸鏡」「走獸葡萄鏡」等に銘文が鑄出された。銘文の例をここに挙げる。

- ・光正随人、長命宜新。
- ・昭仁炳徳、益壽延年、至理貞壹、鑿保長全、窺庄益態、辯皂增妍、開花散影、浄月澄圓。
- ・窺庄益態、韻舞鴛鴦、萬齡永保、千代長存、能明能鑿、宜子宜孫。
- ・靈山孕寶、神使觀爐、形圓曉月、光清夜珠、玉臺希世、紅莊應圖、千嬌集影、百福來扶。
- ・絶照覽心、圓輝属面、藏寶匣而光掩、挂玉臺而影見、鑿羅綺於後庭、寫衣簪乎前殿。
- ・楊府可則、盤龍斯鑄、徐稚經磨、孫承晋賦、散池菱影、開雲桂樹、玉面方窺、仙刀永故。
- ・團團寶鏡、皎皎昇臺、鸞窺自舞、照日花開、臨池滿月、都貌嬌來。
- ・武徳五年歲次壬午八月十五日甲子 揚州總管府造青銅鏡一面 充癸未年元正朝貢 其銘曰上元啓祚 靈鑿飛天 一登仁壽 于萬斯年。

隋唐時代の鏡文化（1）

- 美哉圓鑿，覽物稱奇，雕鑄合矩，鎔洗應規，仙人累瑩，玉女時窺，姮娥是巧，服御筱宜。
- 美哉靈鑿，妙極神工，明疑積水，淨若澄空，光涵晉殿，影照秦宮，防奸集祉，應物無窮，懸書玉篆，永鏤青銅。
- 蘭閨啾啾，寶鏡團團，曾雙比目，經舞孤鸞，光流粉黛，采散羅紈，可憐無盡，嬌羞自看。
- 仙山並照，智水霽名，花朝艷采，月夜流明，龍盤五瑞，鸞舞雙情，傳聞仁壽，始驗銷兵。
- 仙山並靈，智水參名，花舞豐彩，晝夜流明，龍盤五瑞，鸞舞雙情，傳山並壽，始驗明樂。
- 阿房照膽，仁壽懸宮，菱藏影內，月掛壺中，看形必寫，望裏如空，山魃敢出，水質慚工，聊書玉篆，永鏤青銅。
- 寫月非夜，疑水不寒，影合真鹿，文瑩翔鸞，粉壁交映，珠簾對看，潛窺聖淑，瑞則常端。
- 既知愁裏日，不寬別時要，惟有相思苦，不共体俱消。[五言古詩]
- 淮南起照，仁壽傳名，琢玉斯表，熔金勒成，時雍炎晉，節茂朱明，援模鑿澈，用擬流清，光無虧滿，葉不枯榮，圖形覽質，千載為貞。
- 規鑿鑿水，彩艷藍缸，銷兵漢殿，照胆秦宮，龍生匣裏，鳳起臺中，桂舒全白，蓮開半紅，臨妝並笑，對月分空，式固貞吉，君子攸同。
- 明逾滿月，玉潤珠圓，鸞驚鈿後，鳳舞台前，生菱上壁，倒影澄蓮，情靈應態，影逐妝妍，清神鑿物，代代流傳。
- 桂臺月滿，玉匣光妍，影臨殿壁，花含並蓮，圖菱照耀，鏤遠聯綿，遙方合璧，瑞我皇年。
- 天地含為，日月貞明，寫規萬物，洞鑿百靈。
- 鑿若止水，光如靈耀，化客來磨，靈妃往照，鸞翔鳳舞，龍騰麟跳，寫態懲神，影茲巧笑。
- 鑿若止水，皎皎秋月，清輝內容，菱華外發，洞照心胆，屏除妖孽，永世作珍，服之無沫。
- 冬朝日照梁，含怨下前床，帷寒以葉帶，鏡轉菱花光，会是無人覺，何用早紅妝。[五言古詩]
- 鎔金琢玉，圖方寫圓，質明采麗，菱淨花鮮，龍盤匣裏，鳳舞臺前，對影分咲，看鏡若妍。
- 照心寶鏡，圓明難擬，影入四隣，形超七子，菱花不落，迴鳳詎起，何處金波，飛來匣裏。
- 賞得秦王鏡，判不惜千金，非關欲照膽，特是自明心。[五言絕句]
- 玉匣初開鏡，輕灰拭故塵，光如一片水，影照兩邊人。[五言絕句]
- 玉匣盼開蓋，輕灰拭夜塵，光如一片水，影照兩邊人。[五言絕句]
- 鏡發菱花，淨月澄華。
- 澄清花鏡，菱精華淨。
- 別春馳憂，結戀離愁。
- 月曉河澄，雪皎波清。
- 發花流采，波澄影成，月素齊明，鑿秦逾淨。
- 象物徵神，朗月澄真。
- 放日圓形，象質摸星。
- 光流素月，質稟玄精，澄空鑿水，照迴凝清，終古永固，瑩此心靈。
- 照日菱花出，臨池滿月生，官看巾帽整，妾映點妝成。[五言絕句]
- 盤龍麗匣，鳳舞新臺，鸞驚影見，日曜花開，團疑璧轉，月似輪迴，端形鑿遠，膽照光來。



図1 唐・瑞獸鏡 拓本

- ・練形神冶，瑩質良工，如珠出匣，似月停空，當眉寫翠，對臉傳紅，綺窓繡幌，俱含影中。(図1)
- ・有玉辞夏，惟金去秦，俱随掌故，共集鼎新，儀天寫質，象日開輪，率舞鸞鳳，奔走鬼神，長懸仁壽，天子萬春。
- ・花發无冬夏，臨臺曉夜明，偏識秦楼意，能照点妝成。[五言絶句]

隋から唐初にかけての鏡は漢魏以来の伝統が継承されるが、新たな要素も出現している。鏡の主文様は異なるが、銘文に定型化した共通性をもつことが一つの特徴である。銘文帯には楷書または隸書で以て吉祥を表す4文字を中心とする駢文体の詩句が配され、隋の年号の「仁寿」を鋳出した鏡もみられる。この時期の大業7年(611)墓から、銘帯をもつ方格四獣鏡も出土している。このほか、伝世鏡の中に「永徽元年」の紀年銘をもつ四神鏡もある。

銘文に古体詩・近体詩の五言詩が間々現れることも特徴の一つである。このうち近体詩は初唐期に成立した新しい詩型である。この時期の後半には、銘文の内容が長寿・高官などを祈願する吉祥句から次第に鏡の効能や風雅な宮殿・楼閣を称える句に変化していく。しかし、この時期以降は銘帯が消失していく。初唐を過ぎるとやがて銘文がほとんど無くなる。

## II・Ⅲ期 盛唐期

盛唐期になると銘文鏡が明らかに減少し、やがてほぼ姿を消し、華麗な鏡が次々に出現する。ここに盛唐の前期・後期にそれぞれ盛行した主な鏡(銘文無)の名称と銘文鏡の銘文の例を挙げる。

前期に盛行した鏡：「海獸葡萄鏡」「狻猊双鸞鏡」「雀繞花枝鏡」

後期に盛行した鏡：「花鳥鏡」「瑞花鏡」「飛仙鏡」「高士弹琴鏡」「孔子榮啓期鏡」「月兔鏡」

「馬毬鏡」「狩獵鏡」「雲龍鏡」

唐中期にあたる盛唐にいたると鏡は華麗絢爛の時代に入り、芸術美を追求するとともに身近な事物をモチーフとした文様が考案された。この時期は鏡の様式や手法の多様化が大きな特徴であり、製作技術も精緻をきわめ、華麗な盛唐の気風がみられる時代である。鏡背の空間が広がったことで自由な図柄の構成が可能となった。鏡の主文様が瑞獣から禽鳥へ、さらに植物文様へと変化していくほか、神話伝説を題材とした鏡が大量に出現する。この時期においては図文が重んじられ銘文が軽視されたといえよう。銘文鏡が明確に減少し、ごく一部の鏡に銘が見られるのを除き銘文がほぼなくなる。特に銘帯を巡らす現象がなくなり、鏡に銘文を入れる伝統が失われたことが窺える。

盛唐後期に至ると銘文鏡の数は限られるが、幾つかみられる。銘の記された鏡の一つに「高士弹琴鏡」がある。これは「伯牙弹琴鏡」とも呼ばれ、鏡背に「真子飛霜」の銘文4文字を刻した鏡である。「高士弹琴鏡」にはもう一つ銘帯が施された鏡例があり、その銘文は隸書体で記され「鳳凰双鏡南金装、陰陽各為配、日月恒相会、白玉芙蓉匣、翠羽瓊瑤帶、同心人、心相親、照心照胆保千春。」と、三言・五言・七言の不揃いの長短句からなっている。

また「孔子榮啓期鏡」は「三樂鏡」とも呼ばれる鏡で、儒教の伝統的思想を反映したものとされる。鏡名はその銘文「榮啓期間曰答孔夫子」に由来するもので、中唐の詩人白居易の詩などにも「榮啓期三樂」を題材とした作品がみられる。

八花形の「月兔鏡」の中に特異な鏡が一つあり、鏡背に三重の銘帯が施されている。玄宗・開元の年月日が刻されたこの銘文は、次にみる如く156字にも及ぶ銘辭が楷書体で記されている。「楊府呂氏者、其先出於呂公望、封於齊八百年、与周衰興、後為權臣田兒所篡、子孫流迸家子淮揚焉、君氣高志精、代罕知者、心如明鏡、曰：得其精焉。常云：秦王之鏡、照胆照心、此蓋有神、非良工所得。吾每見古鏡極佳者、吾今所製、但恨不得、停之多年、若停之一二百年、亦可毛髮無穩矣。蘄州刺史杜元志、好奇鑒賞之士、吾今為之造此鏡、亦吾子之一生極思。開元十年五月五日鑄成、東平郡呂神賢之詞。」これは唐鏡においては最長の銘文の一つである。このほか「月兔鏡」については、八稜形の鏡の中に、鏡背の図文の間に「大吉」「水」の3文字が記された例もみられる。

また盛唐期の「雲龍鏡」と「双鳳鏡」には「千秋」の2文字の銘を刻した鏡が少数ながら見られる。玄宗皇帝が、その生日である「千秋節」に文武百官に銅鏡を下賜し、また群臣が皇帝に鏡を献上する風習があったことが史書に記載されており、「千秋」銘入りのこれらの鏡がその中の一種であったと考えられる。「双鳳鏡」には「大吉」2文字の銘の入った珍しい八稜鏡もある。ほかに「千秋万歳」銘入りの「四獸鈕陰鑿鏡」方形鏡もある。

このほか玄宗に献上された鏡と伝えられるものとして「五岳八卦星辰鏡」があり、これには篆書で「天地含象、日月貞明、寫規萬物、洞鑒百靈」16文字の銘文が刻されている。上述の「隋唐鏡の各時期の銘文 隋～唐初期」の鏡銘の中にもこれと類似する銘文がみられる。

また「天寶二年冬十月三〇〇〇王陽於〇城之南郊。」と、玄宗・天寶年間の紀年銘が刻された鏡もある。「鴛鴦蜂蝶鏡」には、四言2句の「秦家宝鏡、恒照紅顏」の銘文例がみられる。以上のほか、三言句の「龜自卜、鏡自照、吉可貞、光不耀。」と七言絶句の「月様團圓水様清、好將

香閣伴閑身，青鸞不用羞孤影，開匣当如見故人。」はこの時期の鏡銘と考えられるが，三言四句・七言絶句のリズムは稀にみるものである。

以上総覧するごとく，盛唐期の鏡の銘文は総じて不規則・不統一であり，一定のパターン化したスタイルは見られず，ユニークな様相を呈していると言えよう。

#### IV期 唐晩期

安史の乱によって社会が混乱に陥ったあとの唐晩期は，唐王朝が急速に衰退していく時期にあたる。銘文を配した鏡が再び増加する時代であり，銘帯鏡も登場してくる。鏡の主文様は宗教的意味合いをもつ図文と銘文が盛行し，伝統的な道教の「八卦文」と仏教の「卍字文」が用いられた鏡が広く流行した。一方で，銘文を伴わない「花葉文鏡」も盛行した。

このうち「八卦鏡」は主文様の八卦文に加えて下記の銘文・銘帯を入れた鏡など，多くの種類がある。四字句の駢文体の銘が多数みられるほか，長短句もある。楷書もしくは隷書で記されたこれらの銘文は，神仙を求め邪気を追い払う内容のものが多く，道教的な色彩が強く反映されている。八卦鏡には銘文とともに山川・日月・干支・十二支の図柄が配されることが多い。唐代は正に道教が盛行した時代であり，その影響のほどが銘文鏡にも窺える。

- ・子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥。
- ・精金百煉，有鑒思極，子育長生，形神相識。
- ・形□□□，保□長生，水銀陰精，辟邪□□。
- ・水銀呈陰精，百煉得為鏡，八卦寿象備，衛神永保命。[五言古詩]



図2 唐・双鳳八卦鏡 拓本



## 隋唐時代の鏡文化（1）

- ・上圓下方，象於天地，中列八卦，備著陰陽，辰星鎮定，日月貞明，周流為水，以名四瀆，內置連山，以旌五岳。（図2）
- ・百煉神金，九寸圓形，禽獸翼衛，七曜通靈，鑿□天地，威□□□，□山仙□，奔輪上清。
- ・元長父舍，玄凌交度府，太玄禁府，太清館，太華台，紫薇宮，黃帝大居堂，太素右堂。
- ・長庚之英，白虎之精，陰陽相資，山川郊靈，憲天之則，法地之寧，分列八卦，順考五行，百靈無以逃其狀，万物不能遁其形，得而寶之，福祿來成。
- ・透光寶鏡，仙傳煉成，八卦陽生，欺邪主正。

「双鳳八卦鏡」のなかには「上圓下方，象於天地，中列八卦，備著陰陽，……」の銘文に加えて，鈕上方の円圈内に「鎮」一文字を入れた例がみられる（図2）。

「卍字文鏡」の中には，「卍」字の間に4文字の「永寿之鏡」や2文字の「受歲」を入れた鏡がみられる。なお，卍は梵字で，「吉祥万徳の集まる所」の意とされ，銘文とともにいずれも吉祥を表す。

ほかに，この時期の鏡例として「高士弹琴鏡」の方形鏡に「侯瑾之」の3文字の銘が刻まれた銘文鏡がある。

中唐の詩人である韓愈・柳宗元が古文の復興運動を提唱したことはよく知られている。その頃，文壇では古文が駢儷文に取って代わっていたが，この風潮が鏡の銘文作りにも影響を与えたものと思われる。そのことが銘文鏡の少ない原因や背景の一つになっていると言えるであろう。しかし晩唐にいたると却って古文が衰微したために駢文が再び興り，上述の如く銘文鏡が増えてくる。ただ駢文の流行はすでに過去のものとなっていたため，単に一時的に出現したものであったとも考えられる。

## 5. 隋唐鏡の銘文の特徴

中国では戦国末期に銘文鏡が出現したが，以来，鏡の銘文の書体と内容は時代とともに発展・変化し，それぞれの特徴がみられる。銘文の書体と内容は，鏡の編年の根拠にもなりうるものである。

隋唐鏡に刻された銘文の筆遣いは，漢鏡によく用いられた篆書体や異体字・略字のものとは異なる。銘文の筆画の省略はなく，文字の欠落もほとんど見られない。字句は整い規範的である。字体については，篆書は少数であり，楷書体もしくは隸書体が多く，文字が大きく明瞭である。筆致は精巧・繊細で綺麗であり，隋唐時代の風格が表現されたものといえる。

### 5-1. 隋唐鏡の銘文の主題

隋から初唐にかけての鏡には伝統的要素が強く残っており，漢鏡にもみられる絶賛・称賛や祝賀・祈願などの吉祥句が韻文で書かれた圈帯銘文がその一つである。しかし漢式鏡と異なり，隋唐鏡の銘文には一般に紀年がなく，製作地や工匠名も記されていない。隋・初唐の銘文鏡の内容を見渡すと，もはや漢鏡のように出世や商売繁盛，あるいは神仙世界への渴望をひたすら表現す

ることがない。例えば「光正随人, 長命宜新」「千嬌集影, 百福来扶」など, 考案された銘文は謳歌・賛美・称賛を表現した吉祥句であり, 対句を用い押韻によって美しさを追求した詩である。大半が滑らかな四言・五言の形式であって長短句は少ない。詩の表現は華麗で洗練されており, 中には詩人の詩詞や語句の引用とも思われるものも見られる。

隋唐の銘文鏡には男女の相思相愛の情を詠った銘文が少なくない。「窺庄益態, 韻舞鴛鴦, 萬齡永保, 千代長存, 能明能鑒, 宜子宜孫」は, 男女の相思相愛・女性的美貌・子孫繁栄・魔除けを祈願する複合的な内容の例である。また五言古詩の「既知愁裏日, 不寬別時要, 惟有相思苦, 不共体俱消」には, 孤独の中でひとり思慕する女性の閨怨が強く詠われている。この一首によっても, 男女の恋愛感情を吐露した五言詩が存在することが窺えよう。ほかに四言句の「鸞窺自舞, 照日花開, 臨池滿月, 都貌嬌来。」、五言句の「冬朝日照梁, 含怨下前床, 帷寒以葉帶, 鏡轉菱花光, 会是無人覚, 何用早紅妝。」、七言句の「月樣團圓冰樣清, 好將香閣伴閑身, 青鸞不用羞孤影, 開匣当如見故人。」などがあり, これらの詩文は, 情に溢れ人の心をつ打つものがある。

この時代の銘文の主題は大きく5つに分けられる。一つ目は上述の如く女性的美貌や日常をテーマとして, その中で女性の願い事を描写するとともに, 日頃の虚しい生活や物思いに沈む表情を描いている。ただし漢鏡の物悲しい歌声とは異なり, 王朝の繁栄を背景として, 隋唐鏡では総じて天下泰平の世の明るい愛情表現となっている。例として上述の銘文のほか, 「當眉寫翠, 對臉傳紅, 綺窓繡幌, 俱含影中」「龍盤匣裏, 鳳舞臺前, 對影分咲, 看鏡若妍」「照日菱花出, 臨池滿月生, 官看巾帽整, 妾映點妝成」など種々みられる。

主題の二つ目は, 鏡の鏡背図文について詠い, それにかけて鏡に映る人の心境を隠喩する銘文である。字句はいずれも柔和で美しく, 艶めかしい修飾語が多いが, 実は晴れない心の苦悩・悲哀を表現している。銘文の気風は, 唐詩のもつ清新・豪放・壮麗さと比べ大きく異なるものがある。

主題の三つ目は, 鏡自体を主題とした銘文で, 鏡の品質などを誇る内容が少なくない。「美哉靈鑒, 妙極神工, 明疑積水, 淨若澄空, 光涵晋殿, 影照秦宮……」「靈山孕寶, 神使觀爐, 形圓曉月, 光清夜珠……」「練形神冶, 瑩質良工, 如珠出匣, 似月停空」などと, 表現された美辞麗句は漢鏡の露骨なものに比べると控えめであり, 味わい深いものがある。

主題の四つ目は, 「仙山並照, 智水霽名……」など神仙を希求する銘文である。幾つかみられるが, 漢鏡のように「東王公」「西王母」の神仙名を入れることもなく, やはりセーブされた内容であると言えよう。

主題の五つ目は, 「洞照心胆, 屏除妖孽」「率舞鸞鳳, 奔走鬼神」など, 邪気を追い払い, 福を招来する吉祥句を入れた銘文である。

## 5-2. 隋唐鏡の銘文のスタイル

上述の如く漢鏡の銘文では, 三言, 四言・五言・六言・七言を種々組み合わせた長短句がみられた。また, 別離の夫への妻の思いを表した「君行卒, 予志悲, 久不見, 侍前稀」「長相思, 毋相忘」などの三言句のほか, 四言・六言・七言の詩句もあり, 実に多種多様である。

四言古詩といえば, 『詩経』は四言詩が中心であるが, 四言詩はリズムが単調なために早く衰

えたとされる。四言の詩歌自体は後漢末・晋～宋にかけて一時的に作られたのみで、それ以後はごく稀であった。隋～唐初の銘文鏡では『楚辞』・辞賦の流れをくむ駢儷体の詩文形式が多いことが一つの特徴である。前時代の気風は残るが、銘文は大半がワンパターンの駢文体四字句であり、対偶法を用いた韻文で表現されている。この四言句の詩文のリズムが主に取り入れられ、次いで多く採用されたのが五言の古詩や絶句のスタイルである。長短句の形式は少ない。隋・唐初期の銘文鏡では主に駢文体が多いが、従前からあった緩やかな規則の古詩のスタイルも採用対象の一つであったと考えられる。古体詩の規則では、句数に制限がない上に、句の長さは五言・七言を主とするも、他に四言でも、不揃いの長短句でもよい形式となっている。近体詩のような厳しい平仄の規則もなく、押韻は途中で換韻してもよい。実にルーズなスタイルである。漢鏡の銘文に見られた古詩の伝統的スタイルが一部踏襲されたと考えられる。

隋唐の「四神十二支鏡」「瑞獸鏡」「団花鏡」等に刻まれた銘文を見ると、四言句が主流になっているが、中には四言の2句に、六言の4句を繋いだ長短句の構成も見られる。四・四・六・六と字数をそろえたリズムで対句の美しさを競うのは四六駢儷文の特徴である。漢魏時代に起源をもつ駢文体は六朝時代に盛行し、唐代に至ると四言句・六言句を交互に用いた四六文として発達し文壇で盛んに用いられた。したがって、鏡銘にこの駢文のリズムが採用された要因として、形式美を誇る技巧的駢儷体の流麗なスタイルが、ちょうどこの隋・唐初期に文壇で流行していたことが背景にあったことが考えられる。駢文体の銘文が鏡に鋳出されたのは鏡鑑史上、隋・唐初期が最初になる。

ところで唐鏡の銘文には、四言のリズムの中に回文句という回文式の詩が見られる。このスタイルは「回環」とも呼ばれるものである。駢儷体の銘文のうち、回文体の詩は銘文全体が各一文字、もしくは二文字で上下（首尾）両方から循環して読むことができ、いずれの場合もそれぞれ意味を成すのが特徴である。上述の「鏡發菱花 淨月澄華」「澄清花鏡 菱精華淨」「別春馳憂 結恋離愁」「象物徵神 朗月澄真」「月曉河澄，雪皎波清」は、いずれも対句に技巧を凝らしてあるほか平仄を整え、韻も踏んだ回文詩である。頭から順に読んでも尾から逆に読んでも、いずれも一文をなす。「月曉河澄，雪皎波清」の一文を例にとると、頭から順に読めば「月曉河澄，雪皎波清。曉河澄雪，皎波清月。河澄雪皎，波清月曉。澄雪皎波，清月曉河。」となる。尾から逆に読むと「清波皎雪，澄河曉月。波皎雪澄，河曉月清。皎雪澄河，曉月清波。雪澄河曉，月清波皎。」となる。ほかに四連句の「發花流采 波澄影成 月素齊明 鑒秦逾淨」の回文詩もある。回文式の文体は、首尾いずれからの読み方も可能であるほか、最初と末尾から交互に読むなど、上下往来して幾通りもの読み方があるとされる。「鏡發菱花 淨月澄華」の詩句について、梁上椿はかつて「この銘文8文字については読み方が甚だ多い。順に読んで四言8首，終わりから読んで四言8首，さらに終わりから読んで五言8首，首尾交互に読んで五言8首，併せて32首になる。」と解説している。この種の回文詩はいわば言葉遊びであって、中には無理があると思われるものもある。もともと駢文体は美辞麗句を追求したものであって、言葉の割には中身が薄いという特徴があるため、内容よりも形式を重んずるものであった。それは初唐の詩の特徴とされる「形式美」の気風と相通じるものがあると認められる。しかし、文字遊びのきらいはあるものの、そこには巧み

な工夫が凝らされているとも言える。詩文の才に長じた作者の創意ある苦心作であるともいえよう。

隋・唐初の鏡には、もう一つの特徴である五言詩の銘文の用例が少なくない。五言古詩は後漢末の「古詩十九首」が原点とされるが、六朝時代に成長して主流となったスタイルである。漢鏡ではほとんど見ることのない五言のリズムが、隋唐鏡には出現している。五言古詩のみならず近体詩の五言絶句も鋳出されており、銘文に彩を添えている。一方、七言のリズムによる詩型は前時代の六朝末期頃から急速に詩人によって用いられるようになっていたが、唐代には五言詩とともに詩の主流をなすに至っている。しかし、漢鏡の銘文にも採用されたこの七言のリズムは、却って唐の銘文鏡にはほとんど反映されることがなかった。七言絶句の銘文の鏡例としては上述の「月様團圓氷様清，好将香閣伴閑身，青鸞不用羞孤影，開匣当如見故人。」があり、相思相愛の情を詠じた一首である。また八卦鏡の銘文の一部に現れた「百靈無以逃其状，万物不能遁其形」など、七言句が用いられた例は極めて少ない。

唐代の特殊な銘文鏡の一つに武徳五年(622年)の年号が記された「四神十二支鏡」(『博古圖録』収載)があるが、ここに刻まれた銘文「武徳五年歲次壬午八月十五日甲子 揚州總管府造青銅鏡一面 充癸未年元正朝貢 其銘曰 上元啓祚 靈鑿飛天 一登仁壽 于萬斯年」に至っては、別物のスタイルとして捉えられよう。

隋唐鏡の銘文のスタイルの特徴について総括するならば、次のように纏めることができる。隋・唐初期の鏡の銘文の基本的スタイルは駢文体の四言の韻文であるが、これには四言の二句・四句・六句・八句・十句・十二句の多種の銘がみられるほか、四六の長短句もある。平仄を整えた四言古詩もある。五言古詩と五言絶句も見られる。ほかに特殊なスタイルの武徳紀年銘がある。盛唐期については基本的に鏡に銘文を入れる風習はみられないが、いくつか例外的な鏡例がある。これには二言句・三言句・四言句・九言句・長短句・七言絶句および開元紀年銘(156文字)・天寶紀年銘がある。ここには一定のパターンのスタイルが見られず、伝統から離れ独特の様相を呈している。唐晩期の鏡では駢文体銘が復活し、四言句の複数パターンの銘文がみられる。このほか、二言句、三言句、四言句、および三言・四言・五言の組合せの長短句、四言・七言の組合せの長短句、さらに四言古詩・五言古詩も表されている。

## 6. 結びにかえて

中国では、中華帝国が完成した前漢時代より鏡に銘文を入れるのが一般的になる。鏡の繁栄期のスタートである。その伝統は後漢時代、そしてその後の魏晋南北朝時代にも受け継がれていく。300年にわたる南北朝の分裂時代に終止符を打ったのは隋であった。隋は父子2代のわずか38年の短命に終わったが、父・文帝の代には律令制の整備および科挙の創設が行われ、子の煬帝の代では土木事業の大興城・洛陽城の都城建設が進められたほか、さらに南北の交通・流通システムを大きく開いた大運河が開発された。ここにおいて南北の統合が進み中華世界が再統一されて、つぎの唐王朝に引き継がれていく。鏡作りの方面では、隋と唐初の時代には漢魏以来の伝統が色

濃く残る鏡が製作され、銘文を入れる風習がそのまま継承されている。鏡銘には近体詩もあるが古体詩と駢文のスタイルが主に採用され、特に形式美を誇る技巧的駢体の詩文がこの時期に盛行した。回文詩などの銘文の気風は、初唐の詩風である「形式美」の特徴と相通ずるものがある。

唐は貞観の治を現出させた第二代皇帝・太宗を経た後、第三代皇帝・高宗の時代にいたると広大な版図は最大となり、中華帝国からさらに世界帝国へと発展し、巨大化した。漢字文化圏の東アジアのみならず西方では中央アジアの果てに達するほど領域が拡大し、最盛期の第六代皇帝・玄宗の時代まで強大な大唐帝国の時代がつづく。人口100万を擁する都・長安は外国人が行き交う国際的な世界都市として栄えた。世界各国の大使・商人・留学生・学問僧・旅人が多数集まるインターナショナルな雰囲気は、さながら今日のニューヨークに喩えられる。政治・経済・文化などあらゆる面で空前の繁栄を誇った唐は、多くの国々に大きな影響を与え、絹織物を中心とする物品が交易されるなかで、唐鏡も陸海のルートを通じて海外へ頻りに運ばれている。日本のほか、朝鮮・モンゴル・ロシア・イラン（ペルシア）および中央アジア諸国などで広範に唐鏡が発見されており、海外で広く伝播していたことが知られる。日本・朝鮮のみならず、遠くペルシアでも唐鏡が模造されていたほどであった。

鏡作における現象をみると、世界帝国として発展した時期にあっては諸外国との異文化間交流が活発かつ密接であったため、対外関係の促進を重視して意識的に鏡背に漢字の銘文を入れなかったかにもみえる。中華世界で共有された漢字による銘文はこの時代の鏡にあっては強調されなかったようである。科挙制度が発達し、詩歌の躍動する最盛期にありながら、詩文の銘を施した鏡は盛唐期にはほとんど現れていない。却ってシルクロードを通じて伝来したペルシアなど西アジア・中央アジアのデザインや図案をとり入れた鏡や、東西の文化がミックスし融合した文様の鏡が流行した。鏡例として盛唐期の海獸葡萄鏡・狡狴双鸞鏡・馬毬鏡・狩獵鏡・花鳥鏡などの豪放な写実的鏡があげられよう。これらの鏡には銘文は刻まれていない。

唐代には銘文鏡の空白の時代があり、それは鏡鑑史の盛唐期にあたる。特にその後半は玄宗皇帝の治世年間で、鏡作の最盛期でもあり、近体詩が熟成したのもこの時期であったが、この時代には銘文鏡があまり製作されていない。盛唐の詩の発展・盛行とほとんど関わることなく、鏡背の図文が考案されていたことになる。時は漢詩文化がもっとも花開いた時代であって、漢詩の都・長安では数多くの詩人が集まっていた。詩の最盛期となり、詩歌が大量に作られて市井に出回ったためであろうか、却って詩辞を鏡の図文の中に表現することがなかったようにも思われる。厳格なルールをもつ律詩や絶句の近体詩のスタイルは初唐にはすでに成立していたが、盛唐期の鏡作にあたってはほとんど無視された形であった。盛唐の詩の特徴である「雄健高雅」の風格は鏡に明確に反映されることがなかったと言えよう。ただ唐鏡の最盛期であった玄宗時代の鏡文様を見ると、中国の伝統的文化思想および伝統的文様を強調する一面もみられる。中国古来の神話伝説に由来する高士弹琴鏡・孔子榮啓期鏡・月兎鏡および雲龍鏡などの鏡作がその表れである。これらの鏡種にはいずれも銘文が入っている例が見られるが、千篇一律ではなく、個性的・変則的な銘を特徴とする。時代は鏡の盛唐後期にあたる時期であり、玄宗皇帝が国政を顧みず対外政策にも関心を示すことのなかった時期と重なっている。

安史の乱以後、世界帝国が衰退し、勢力範囲が縮小したが、華麗な鏡文様の展開はその後も一定の期間つづく。しかしながら銘文鏡がほとんど製造されない時代が依然として継続する。銘文鏡・銘帯鏡が再び増加する現象は、唐帝国の国力が低下していく唐晩期に起こってくる。ただし、この時代の銘文の入った鏡は隋・唐初の時代のものとは趣を異にする。唐末には道家の八卦・五行説が盛行したが、鏡銘にもそのことが表れており、特色として宗教的意味を含む銘文がこの時期に流行している。唐詩の詩風の特徴として、中唐詩は「平淡」「陰怪」、晩唐詩は「繊細優艶」と評されるが、このうち「平淡・陰怪」の気風が唐晩期の鏡作の五言詩にわずかに反映されているといえよう。

総じて、銅鏡においては唐王朝の空前の発展・繁栄とともに銘文の製作が放棄され、鑄鏡にあたっては図像のほうに重きが置かれたといえる。唐代の銘文鏡の盛衰は、その背後にある要因の一つとして、唐の国力の消長や唐の対外交渉の進退とも関わっている面があるようにも思われる。唐初期を除けば、銘文鏡は現象として主に唐晩期に多数登場するのみであった。

唐代以降では、前近代のガラス鏡の出現にいたるまでの間、銘文鏡は次第に減少して衰微する。見るべきものは少ない。わずかに次の宋代に独特な商標銘文鏡と吉祥銘文鏡が製作されている。商標鏡の代表格は、北宋末に鑄造されはじめ南宋代に盛行した「湖州鏡」で、市井で広く用いられた鏡である。また吉祥銘文鏡の一つに、今日よく用いられる「但願人長久，千里共嬋娟」の文字が入った鏡もみられる。

次の、ユーラシア大陸の東西に跨る未曾有の世界帝国を築いた元代では世界規模のネットワークが形成されたが、鏡作は逆に大幅に減少し、銘文鏡の種類は限られ、文様は粗雑になっている。その後、銅鏡において銘文が重んじられたのは漢民族による中華世界の復興が果たされた明代であり、伝統的な四字吉祥句の「金玉滿堂」「長命富貴」「百歳團圓」「壽山福海」などを鑄出した銘文鏡が盛行した。

小稿では、紙幅の制約から隋唐鏡の鏡背に描かれた文様の詳細に触れることができなかった。鏡の銘文は、描かれた図像と関連付けて総合的に理解する必要がある。両者の関係については稿を改めることにしたい。

筆者の「甲午元旦七絶一首」をここに附して筆を擱く。

漢學之郷松翠園  
有縁千里赴吟圈  
古詩朗誦家傳道  
携手發揚燦鏡軒

(甲午 春節)

#### [図版出典]

図1・図2 黄濬『尊古齋古鏡集景』上海古籍出版社1990年

[参考文献]

- ・孔祥星、劉一曼『中国古代銅鏡』文物出版社1984年
- ・黄名時「唐の盤龍鏡」日中学院出版局『中文教学No. 9』所収1985年
- ・岡崎敬『中国の考古学 隋唐篇』同朋舎1987年
- ・陳佩芬『上海博物館藏青銅鏡』1987年
- ・梁上椿『巖窟藏鏡』同朋舎1989年
- ・程長新、程瑞秀『銅鏡鑑賞』北京燕山出版社1989年
- ・黄濬『尊古齋古鏡集景』上海古籍出版社1990年
- ・黄名時「唐代の天子鏡—その盛行年代を中心として—」汲古書院『竹田晃先生退官記念 東アジア文化論叢』所収1991年
- ・周世榮『中華歷代銅鏡鑑定』紫禁城出版社1993年
- ・李澤奉、劉如仲『銅鏡鑑賞与收藏』吉林科学技術出版社1994年
- ・黄名時「破鏡（重圓）の伝承とその習俗—漢六朝隋唐の副葬半折鏡—」『名古屋学院大学外国語学部論集6-2』所収1995年
- ・裘士京『銅鏡』黄山書社1995年
- ・昭明、洪海『古代銅鏡』中国書店1997年
- ・馬今洪『漢鏡』上海科学普及出版社1998年
- ・華光普『中国歷代銅鏡目錄』中国環境科学出版社1998年
- ・丁孟『銅鏡鑑定』廣西師範大学出版社2000年
- ・余繼明『中国銅鏡圖鑑』浙江大学出版社2000年
- ・程林泉、韓国河『長安漢鏡』陝西人民出版社2002年
- ・張金明、陸旭春『中国古銅鏡鑑賞圖録』中国民族攝影藝術出版社2002年
- ・劉藝『鏡与中国傳統文化』巴蜀書社2004年
- ・段書安『中国青銅器全集 銅鏡』文物出版社2005年
- ・管維良『中国銅鏡史』重慶出版社2006年
- ・姚江波『中国歷代銅鏡賞玩』湖南美術出版社2006年
- ・王大鳴『銅鏡』山東美術出版社2007年
- ・何林『銅鏡』紫禁城出版社2007年
- ・華文圖景收藏項目組『銅鏡收藏實用解析』中国輕工業出版社2007年
- ・王鋼懷、孫克讓『唐代銅鏡与唐詩』上海古籍出版社2007年
- ・故宮博物院『故宮藏鏡』紫禁城出版社2008年
- ・曾甘霖『銅鏡史典』重慶出版社2008年
- ・李強『中国歷代銅鏡賞玩』湖南美術出版社2009年
- ・施萬逸『海外皮藏中国青銅器 金銀器 銅鏡精品集』文物出版社2010年
- ・上海博物館『鏡映乾坤』上海書画出版社2012年
- ・浙江省博物館『古鏡今照』文物出版社2012年
- ・霍宏偉、史家珍『洛鏡銅華』科学出版社2013年

本稿は、名古屋学院大学外国語学部2011年度研究奨励金による研究成果の一部である。